

レオ・F・シュノーア『都市景観—人間生態学と人口学—』

Leo F. Schnore, *The Urban Scene, Human Ecology and Demography*, The Free Press, New York, 1965, x + 374 pp.

1. 著者は社会学・人口学の専攻者であり、ウィスコンシン大学の教授である。都市社会学者として著名であるが、本書の副題が示している如く人口学の分野においても多くの業績を発表している。このような著者の社会学・人口学にまたがる研究を典型的にあらわす課題は“人口の社会移動”である。

2. 本書はシュノーア教授が最近における自己の論文を再編成して集録したもので6部門に分類されている。第1部は人間生態学と人口学、第2部 大都市圏の成長と分散化、第3部 郊外の機能と成長、第4部 都市と郊外の社会経済的地位、第5部 大都市圏の人種構造の変動、第6部 都市における循環の研究となっている。

3. 以上の如く本書の大部分はアメリカにおける都市発展の広汎な分析に関するものであるが、その方法論、思想の出発点は第1部にあると云ってよい。人口学の観点からは、特に第1部が興味を中心であると考えられる。

4. 第2部以外について要約すると次の如くである。第2部ではアメリカにおける大都市圏形成を中心として1世紀にわたる人口の再分布の動向分析を行っている。第3部では衛星都市と郊外の機能の差異をあきらかにし、この区別が郊外成長の異なったパターンへの理解に極めて重要であることを示唆している。第4部は、郊外における社会経済的地位はその中心都市のそれよりも常に高いとは限らないことを豊富な統計によって立証しようと試みたものである。第5部は大都市圏における人種構造の変化というアメリカの特徴的な分析にあてられ、第6部は都市交通特に通勤問題に焦点をおいて分析を行なったものである。

5. 第1部第1章はフランスの Durkheim によって発展せしめられた社会形態学とアメリカにおいて発展せしめられた人間生態学の結びつきを追求し、生態学的アプローチに対し、社会学的財産としての“合法性”を確立しようとした野心的な試みである。

6. もっとも興味ある論文は第1部第3章の“人口学的視野における社会移動”であろう。著者は、社会学と人口学の接点としての“社会移動”領域を考え、あるいは社会移動の研究を通じて社会学と人口学の接近を企図していたともいえる。そうして著者はこのような交流の促進に役立つ3個の貢献領域を指摘する。

7. 第1は理論的、概念上の貢献であって、それは人口移動と“社会空間”移動との形式的類推の厳密な探求によってもたらされる。社会移動を研究する社会学者と人口移動を研究する人口学者は共に移動者対非移動者の属性ならびに移動の量・方向について同様の関心をもっている。今日人口移動分析に使用されているある種の概念や仮説は、社会移動の研究にその利用が可能である。たとえば移動の吸引、押出しならびに機会の概念；介在機会仮説；還流移動の概念；選択移動の概念等々。

8. 第2は技術的な分野であって、社会学者、人口学者にとって重要な課題であるよりすぐれた分類体系の創造ということである。センサスにおける職業分類が死亡や出生力の人口学的研究において利用されているが、多くの点をもっている。社会移動における職業の階層分類も同様である。ここに、社会学、人口学が解決しなければならない分類学上の共通課題がある。

9. 第3は経験的分野における貢献であって、著者は社会移動の国際的、異なった文化間の研究の必要性を強調し、それが人口学者と社会学者の関心間の論理的接点となるという。 (黒田 俊夫)